



Title	Physical and Mental Correlates of Hearing Impairment in the Elderly in Japan
Author(s)	檜村, 裕美
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41672
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について <a> をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	なら 村 裕 美
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 1 4 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 10 年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学研究科 社会系専攻
学 位 論 文 名	Physical and Mental Correlates of Hearing Impairment in the Elderly in Japan (高齢者の聴力障害と身体・精神状況の関連)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 多田羅浩三 (副査) 教 授 久保 武 教 授 武田 雅俊

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

近年、我が国の人口構成は高齢化の一途をたどっている。このような中で、高齢者に対する保健、医療、福祉サービスの充実が重要な課題である。しかし高齢者は加齢による生理的な聴力低下を来している場合が多く、円滑なコミュニケーションを図るうえで障害となっている場合も推察される。聴力障害が身体や精神に影響を及ぼし、その結果として、社会的な孤立感、挫折感、抑うつをひきおこすという考え方は一般的に受け入れられている概念であるが、その実態については今まで報告されていない。本研究は、高齢者の聴力の状態を明らかにし、聴力と関連を有する身体状況および精神の状態を分析することを目的として実施したものである。

【方法】

対象は、平成 6 年 6 月から平成 9 年 4 月までに大阪府 S 市老人保健施設に入所した 65 歳以上の者 869 名のうち、下記の 3 種類の調査が全て可能であった 747 名（男性 209 名、女性 538 名）である。

- 1) 聴力はオーディオメーターを用いて 250, 500, 1000, 2000, 4000, 8000 Hz の気導聴力レベルを測定した。オーディオメーターの最大音で聴取できない場合には、便宜上最大音に 5 dB を加えた値を聴力レベルとした。また良聴耳の 500, 1000, 2000 Hz の聴力レベルの平均値を対象者の平均聴力レベルとした。平均聴力レベルをもとに、25 dB 未満を正常聴力群、25 以上 40 dB 未満を軽度難聴群、40 以上 65 dB 未満を中等度難聴群、65 dB 以上を高度難聴群とした。
- 2) 英国の人口統計情報局社会調査部により開発された支障評価法を用いて、対象者の日常生活における身の回りの世話に対する支障度、および自覚している聴力の支障度を調査した。
- 3) ミニ・メンタルステート・テストを用いた記憶力検査、および自己評価式抑うつ性尺度検査（抑うつ検査）を対面聞き取り法にて実施した。

統計計算は SPSS 7.5 J for Windows によりおこない、すべての統計解析において $p < 0.05$ を有意水準とした。

【結果】

男性入所者の平均年齢は80.2歳で、女性入所者の平均年齢は81.9歳であった。入所者の年齢分布は、性別による有意の差は認めなかった。

年齢階級別周波数別平均聴力レベルは、年齢階級が高くなるに従い有意の低下が見られたが、85歳～89歳の者と90歳以上の者の平均聴力レベルは、全周波数において有意差は認めなかった。

年齢、身の回りの世話に対する支障度、聴力の支障度得点、抑うつ検査得点の平均値は、正常、軽度、中等度および高度の難聴群の順に有意に低値を示し、年齢については各群間の平均値に有意差を認めた。また記銘力検査得点の平均値は、正常、軽度、中等度および高度の難聴群の順に有意に高値を示し、各群間の平均値に有意差を認めた。

平均聴力レベルと単相関分析で有意の相関関係を認めたものは、聴力の支障度、記銘力検査得点、年齢、および抑うつ検査得点であった。

平均聴力レベルを目的変数とし、年齢、身の回りの世話に対する支障度、聴力の支障度、記銘力検査得点、および抑うつ検査得点を説明変数とした重回帰分析では、聴力の支障度、記銘力検査得点、年齢が有意の説明変数として選択され、重相関係数は0.830であった。

【総括】

高齢者の聴力の状態を明らかにし、聴力と関連を有する身体状況および精神の状態を分析することを目的として、65歳以上の高齢者の聴力レベル、身の回りの世話に対する支障度、聴力の支障度、記銘力検査得点、および抑うつ検査得点の調査をおこなった。年齢、身の回りの世話に対する支障度、聴力の支障度、記銘力検査得点、および抑うつ検査得点を聴力レベルにより区分された4群間で比較したところ、聴力と各項目の平均値に有意の関連を認めた。平均聴力レベルと有意の相関が認められたものは、聴力の支障度、記銘力検査得点、年齢、および抑うつ検査得点であり、平均聴力レベルを目的変数とした重回帰分析で有意の説明変数として選択されたものは、聴力の支障度、記銘力検査得点、年齢であった。以上のことより、高齢者の聴力は特に高齢者の記銘力と有意の関連を有しており、その影響は年齢変化よりも大きく関与していると考えられた。定期的な聴力検査の実施による聴力低下の早期発見や必要であれば補聴器の装用指導など高齢者のコミュニケーション能力を維持することは、高齢者のQOLを高める上で重要であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、高齢者の聴力の状態を明らかにし、聴力と関連を有する身体状況および精神の状態を分析することを目的として実施したものである。

対象は、平成6年6月から平成9年4月までに大阪府S市老人保健施設に入所した65歳以上の者、全員869名のうち、聴力検査、英国の人口統計情報局社会調査部により開発された支障評価法を用いた、対象者の日常生活における身の回りの世話に対する支障度評価、および自覚している聴力の支障度評価、ミニ・メンタルステート・テストを用いた記銘力検査、および自己評価式抑うつ性尺度検査(抑うつ検査)がすべて可能であった747名(男性209名、女性538名)である。

高齢者の聴力の実態では、年齢階級別周波数別平均聴力レベルは、男女ともに年齢階級が高くなるに従い有意の低下が見られた。

記銘力検査得点の平均値は、正常、軽度、中等度および高度の難聴群の順に有意に高値を示し、各群間の平均値に有意差を認めた。年齢、聴力の支障度得点、抑うつ検査得点、身の回りの世話に対する支障度得点の平均値は、正常、軽度、中等度および高度の難聴群の順に有意に低値を示した。さらに軽度難聴群では、聴力の支障度得点では、日常生活上の難聴による支障をほとんど認めなかったが、記銘力検査得点では、正常聴力群より有意に低下していた。

平均聴力レベルと単相関分析で有意の相関関係を認めたものは、聴力の支障度、記銘力検査得点、年齢、および抑うつ検査得点であった。

平均聴力レベルを目的変数とし、年齢、身の回りの世話に対する支障度、聴力の支障度、記銘力検査得点、および抑うつ検査得点を説明変数とした重回帰分析では、聴力の支障度、記銘力検査得点、年齢が有意の説明変数として選択され、重相関係数は0.830であった。

本研究は、高齢者の聴力の実態は、男女ともに年齢階級が高くなるに従い有意の低下がみられること、聴力と記銘力、年齢、抑うつ度の間には有意の関連があり、特に記銘力については重回帰分析の結果より、その影響は年齢変化よりも大きいことを明らかにした点で、高齢者の QOL の向上に資する知見を明らかにしたものであり、学位に値する。